"THE QUEST FOR CERTAINTY": John DEWEY: —Operationalismを主軸として— の現代的意義

野　田　彦四郎

The Modern Meaning of "THE QUEST FOR CERTAINTY" by John Dewey
——In a special Reference to Operationalism——

Hikoshirô NODA

In the previous articles, I dealt with "The Influence of John Dewey's Pragmatism on Curriculum in Japan," "Pragmatism and the Future of Moral Education in Japan," "A Comparative Study of William James and John Dewey With a Special Reference to Their Thoughts on Pragmatism," and "My Comments On a Philosophical Polemic Between John Dewey and Bertrand Russell."

John Dewey attempted to form his philosophy on the basis of "Experimentalism" and this idea was realized in the form of "The Quest for Certainty." I intend to trace the way he has developed the principles underlying the present book and also intend to concentrate on the study of "Operationalism," which forms an essential feature of this book.

In other words, it can be said that Dewey tried to unite and fuse both rationalism and experimentalism into one whole, which has been urgently required by pragmatism. The result was this book. I hope to explicate the theoretical and scientific inquiry which has dominated the formation of the book.

I also wish in this paper to explain the statement made in the chapter 10 "The Construction of Good," especially in reference to "Operationalism." It states that Certainty can be only approached through the constant "Inquiry" and "Operation." To make clear the statement, I want to discuss the theme under the following four headings.

1. Dewey's "Inquiry" which stnnds for experimental naturalism
2. "Operationalism" developed systematically in this book
3. A theoretical development of chapter 10 "The Construction of Good"
4. The modern significance of "The Quest for Certainty."

"THE QUEST FOR CERTAINTY" の要旨とこの主題設定の理由

この研究において私はDeweyの立場とするExperimentalism, あるいはPhilosophical Naturalismに立つ哲学が課題とする「確実性の探求」論を展開してゆくすじ道を，このテーマのOperationalismとの関連において明らかにしようと努めた．即ちPragmatimの課題として掲げる「合理論」と「経験論」の帰一と融合について，Deweyが本書を提起し，現代科学の視野において，この課題を精力的に解明しようと努めた理論的探究を明確にしたいと考えたのである．

本書において彼は，第一章「危険の回避」以下第三章に至る論述において，「何故に近代哲学は，われわれが世界について知っているものと，われわれが行うことについての聡明な指導との間に統合を見出すことができなかったのか」の問題提起をなし，続いて第四章，「承認の技術と支配の技術」以下においては次の諸点を重視して考究を進めている．即ち(1)，自然科学の諸結論と価値の客観性とを調和させる問題，(2)，知識と実在に到達するための思想との問題を論じ，現実の知識活動の諸方面にいたる．(3)，理論と実践とを隔てた障壁が破壊されて，精神及び思惟に関する根本概念が再建せられ，ここに認識論上の問題に投げかけた影響，(4)，確実性の探求において，特に行為の社会的方面に及ぼす諸価値の判断の問題，(5)，哲学におけるコペルニクス的革命などである．

この小論において私は"The Construction of Good"の章に重点を注ぎつつ，特に前掲，(4)を中心となしOperationalismを主軸として論じ，Deweyの力説する絶えざる'Inquiry'(探究)によるOperation(操作活動)によってのみ，確実性にアプローチできると主張する'Operationalism'に立つ価値論とこれに併せ論ぜられている「善」の真義を究明し，最後に本書の現代的意義を考究しようと試みたのである．

実験的自然主義の立場を標榜するデューイの"Inquiry"について

"Inquiry"こそは，本書においてはもとより，デューイ哲学における最重要概念である．よってこの哲学的名辞について，まず彼の著書に次のように広く深く論述されている箇所を指摘し，これを究明することにしょう．

1. When a situation has the behavioral an physical characteristics which define it as indeterminate, many cases occur where a behavioral concern (or intent) initiate a behavioral activity called inquiry, and that activity is such that it brings about conditions of behavioral and physical sort which define a determinate situation.

   (The Logic of Pragmatism p.199)

2. We may carry our account further by nothing that refrective thinking, in distinction from other pperations to which we apply the name of thought involves, (1) a state of doubt, hesitation, perplexity, mental difficulty in which thinking originates and (2) nn act of searching, hunting, inquiring to find material that will resolve the doubt, settle and disponse of the perplexity.

   (How We Think : p.12)

3. Inquiry is the controlled or directed transformation of an indeterminate situation into one that is so determinate in its constituent distinctions and relations as to

convert the elements of the original situation into a unified whole.

(Logic: "The Theory of Inquiry pp104-105)

4. Empirically, all reflection sets out from the problematic and confused. Its aim is to clarify and ascertain. (Experience and Nature pp65-66)
5. Many definition of mind and thinking have been given. I know but one that goes to the heart of matter: ……response to the doubtful as such. No inanimate thing reacts to thing as problematic. Its behavior to other things is capable of description in terms of what is determinately there.

(The Quest for Certainty p.224)

6. They are all connected with the theory that inquiry is a set of operations in which problematic situations are disposed of or settled.

(The Quest for Certainty p.229)

7. Reflective inquiry moves in each particular case from differences towards unity; from indeterminate and ambiguous position to olear determination, from confusion and disorder to system. (Experience and Nature p.66)
8. The function of reflective thought is therefore, to transform a situation in which there is experienced obscurity, doubt, conflict, disturbance of some sort, into a situation that is clear, coherent, settled, harmonious.

(How We Think pp.100-101)

9. To say that thinking occurs with refernce to situations which are still going on, and incomplete is to say that thinking occurs when things are uncertain or doubtful or problematic. Only what is finished, completed, is wholly assured. Where there is reflection there is suspense. The object of thinking is to help reach a conclusion, to project a possible termination on the basis of what is already given. (Democracy and Education p.173)
10. Thinking on the contrary, starts, as we have seen, from doubt or unoertainty. It marks an inquiring, hunting, searching attitude, instead of one of mastery and possesion. (Demoracy and Education p.345)
11. Thinking, on the other hand, is prospective in reference, It is occasioned by an insettlement and it aims at overcoming a disturbance.

(Democrasy and Education p.350)

ここに上述の諸論説を総合して考察するとき"Inquiry"(探究)はExperimentalismを標榜するデューイ哲学の必須の概念であり，それは価値判断のプロセスであり，グランドであり，これを統御の技術として捉えると同時に，発見の行為ないし探検的方法として把握することができる．また発展し続けてやむことのない「探究」は科学的な信念を理念的極限にまで，もたらすものということができる，と説くものである．

本書中の第十章"THE CONSTRUCTION OF GOOD"の理論展開

本書中に系統的発展的に強調されているOperationalism.

私はOperation(操作活動)こそ本書における重要概念として把捉する．それは企画として，また知識として，更にデューイの哲学体系における最重要思想名辞として極めて広帆に意義深く

活用されている．本書においてこれを系統的構造的に見ることは，彼の哲学を研究する上において特に必要であると思うのでここにそれを，書中の順を追って列挙することにする．

Page		Chapter
111, 物理的操作活動	Psysical operation	Ideas at work
111, 操作の一組	A set of operations	Ideas at work
167, 操作的活動の企画	Projection of operation	The play of ideas
169, 操作的知性	Operative intelligence	The play of ideas
197, 操作活動の結果	The result of operation	The naturalization of intelligence
204, 操作活動的知性	Intelligence in operation	The naturalization of intelligence
221, 操作活動の概念規定	Operational definition of conceptions	The naturalization of intelligence
242, 操作的推理	Operative inferences	The supremacy of method
243, 操作活動的知性	Intelligent operation of thinking	The supremacy of method
268, 操作的思考活動	Operative thinking	The construction of good
280, 操作的知識	Operative knowledge	The construction of good
297, 操作活動的観念体系	A system of operative idea	The construction of good

諸事実の性質に関する信念と諸価値に関する信念

デューイは本書において先に，論議の最初にあたり，不安が確実性の探求を促すと述べている．そして現代哲学の中心問題は自然科学に基づく諸事実の性質に関する信念と人間の行為を権威づける諸価値に関する信念との間に存する関係を明らかにすることにあるとしている．この問題をとりあげる哲学には信念と行動についての統御を確保するために永遠的価値にうったえるもの，更に，他方において種々の享受が，その生み出された方法や操作活動には顧慮せず，ただ現実に経験される享受を認めていく立場がある．合理的方法論と，経験的方法論との完全な分離は，その最も深い人間的な意味を善や悪が考えられる態度や行動のうちに見られると説き，この事態を哲学が省察する限り，そこには価値の理論について二種の立場があるとする．超越的価値論と経験的価値論がそれである．前者はわれわれの善と悪との価値は，まさに人間の経験上のものであるがゆえに，これらの価値は究極的実在から得られた基準に照らして評価されなければならないとするに対し，後者は，われわれの生活実践，経験という概念で価値を説こうとする理論である．ここで特筆すべきは一般に経験的諸理論は，思惟と判断とは価値に係わりをもつとするのであるが，彼は格別，感情的要素を強調していることである．それはわれわれの欲求によって，思惟と判断とは独立して価値が経験されるという心理学的理論である．

彼はこのような経験論が願望及び満足という具体的な諸経験と関係づけられている限り，反対する意図はないとしながらも，この理論が既に享受された対象を価値あるものとするが，対象が存在するにいたる方法には言及していない点を攻撃している．この理論が知的な諸活動によって統御されていないがために機械的となっている享受を本質的に価値があるとしている点を論駁(ばく)している．ここに操作的思考活動が価値判断に適用される必要があることをくっ

きりと前面におし出している．このOperational thinkingは彼の力説するInstrumentalismの中心概念であるが，これは今までは物的対象の概念に適用されていたものであるが，ここに価値に関する判断にも重要視さるべきものであると主張している．

Operationalism (操作主義) の重視と価値理論

科学における革命とOperationalismの重視により，デューイは人間の行為への考究を進める．即ち科学推進に基づく革命は，直接的な統御のされない経験素材が反省的操作活動によって認識対象へと転化できる素材となるとき生ずるとしている．そのため操作の結果が重要となってくるのである．ここから次のような示唆が生れる．即ち一方では超越的な絶対主義の欠陥から脱れる道は享受が生じさえすれば，それを価値として規定することではなく，知的な行動の結果生じた享受をこそ価値とすべきであるということであり，他方では最近の経験主義の特徴は，現に体験せられた享受を，それ自体，価値と見なす社会的習得をただ単に是認しているに過ぎないが，これでは享受の統制の問題を逸脱しているとなし，われわれが享受を存在せしめるもろもろの関係を発見するとき享受は価値となると説いている．又，科学者にとっては提起せられた理論の蓋然的な真理を決定するに当たって，この理論を絶対的な真理や実在という基準と比べるようなことをしても役に立たない，科学者は一定の条件のもとで行われる一定の操作に依存しなければならない．又道徳においても絶対的な完成とは求めらるべき善，果さるべき義務が具体的なことがらとして，そこに存在するということを認めた上で，これを一般的に具体化していくことが要求される．従ってそこに絶対的な完全性に欠けるところがあっても，それは単に消極的なものではない．要するに価値に関する諸判断は次に示す原文が明示する通りである．

> Judgments about values are judgments about the conditions and the results of experienced objects; judgments about that which should regulate the formation of our desires, affections and enjoyments.

即ち，「価値に関するもろもろの判断は経験された諸対象の条件や結果に関する判断であり，又われわれの願望や感情や享受の形成を統御するものに対する判断である」なぜなら，われわれの願望・感情・享受の形成を決定するものはすべて個人的にせよ，社会的にせよ，われわれの行為の主な動向を決定するのが，つねだからである．

経験理論における，「享受されたもの」と「享受できるもの」，「欲求されたもの」と「欲求できるもの，「現に満足なもの」と「将来満足を与えるもの」の違いを示せば上述の理論に具体的な内容を盛ることができる．即ちこの経験論で誤った点は，価値を欲求や享受と結びつけたことではなくて，根本的に違った種類の享受を区別していない点である．例えば「満足な」と「満足させうる」において，前者は満足なものであるということが事実命題の内容であるのに対して，後者は一つの判断であり，評価であって，未来を想定し，行為の方向を示している．両者の区別の基本的な性格とは，既に存する単なる事実と事実を存在せしめることの意義に関する判断との相違である．この区別を価値と行為の方向づけの関係を追求する鍵として認めることが重要である．そしてこのように価値の経験論に操作的方法を重視するところに科学と価値の契合を目ざすデューイ哲学の真髄をみることができる．

さて，デューイは実験的理論が単なる理論としてではなく，個人の側における習性的諸態度の一部として採用せられるならば，この理論は個人ならびに社会的な行動の上に，いかなる相違をもたらすかについて，次の通りに考究している．

第一．道徳家は従来，自然科学と道徳的と見なされる行為との間に一線を画して来たが，ここに至って一つの道徳的行為は，その価値判断については行為の諸成果に基づいて構成されるものであり，最も緊密な関係において道徳は科学の諸結論に依存しなければならぬ，ことを知るにいたる．そしてこれまでわれわれの生涯に重要な健康・体力・業務・教育という広範囲にわたる諸行為について，狭い料見から，有徳，不徳と截然と分け過ぎて来た不明を覚るようになるだろう．又自然科学者は道徳的な標準や理念の形成について，自然科学者，自らが果すべき役割に対してここに改めて深く認識するようになるだろう．

第二．実験主義が従来からの哲学において主観主義であると呼ばれたものを根底からとり除くようになるだろう(ここでいう主観主義とは実在論的諸哲学――ここでは実在論は二十世紀の実在論ないし，新実在論でなく，プラトン的実在論ないし，西洋中世において唯名論に対抗した実在論を意味する――において盛んであった思惟と知識との標準を先天的実在におくものを指している．)

第三．従来，永遠の理念及び規範といって讃美せられて来た不可変性は，じつは本質的には発展と改善の可能性を拒否してきたものであることに気づき標準原理規則及び善行為に関する一切の教養と信条とを共に仮説とみるようになるだろう．

以上を総合して，このOperationalismを，技術的領域から政治・倫理・文化及び経済生活などの人間生活の広大な領域へと深く浸透させるべきであると，こうした実験主義の主張を広く深く力説している．

操作活動的体系の展開と「善」

デューイによれば，現代哲学にとって最も痛切な問題は「理論」と「実践」の分離の影響のもとに，実行的な手段と理念的な関心の分離が生じていることであり，これについての適切な考察は倫理学・経済学・社会学の全領域にわたる新たな展望を開くという．そしてこの展望はその結果が実際には行為から切り離された思惟及び知識による確実性探求の直接的成果であるのではなく，確実性探究それ自身が現実的諸条件を投射して生まれたものであり，しかもこの探究が哲学及び宗教によって企図せられて，この探究の本来もたらした諸条件を補強する結果を得て来たと主張することは正当であろう．更に回顧すれば，人生の種々の危難に際会して，知性的行動以外の手段により，感情や思惟だけによって安全を探索してきたことは，行動を制御する手段が欠けていたとき，諸技術が未発達のときにはじまったのである．この探究は当時は相対的に是認はされたが，今やすでにこれは過去のことになってしまっている．その幅においても深さにおいても哲学的であることを要求する思考活動の第一の問題は，知識と行動との根本的区分に根ざすあらゆる信念の改造をはかるときの援助をなすこと，又現在の知識と一致し，更に自然的諸事象を支配する現存の識見とも一致する操作活動的体系を展開すること，このことであると断言している．

更に「価値」とは人間がどんなものをどんな風に享受するにせよ，現に享受しているものであるという経験的理論は現代社会の好ましからぬ側面を公式化している．ここにおいて彼は，もしも哲学が人々の思惟と行動とに何等かの影響を与えるとすれば，最も広範な支持を得ている経験的理論が，結局は何らかの関心が持たれた対象そのものを価値とするというような事態を正当化することになるだろうと述べ，結論として「知性的賛同を求めるために，われわれの前に置かれた唯一の価値理論が，ときにわれわれを永久的かつ固定的な価値の領域へと送り，ときにわれわれを実際に得られる享受へ送るというその二途のいずれかをとっている限り，価

値をもって知性的に導かれた行動の成果としての善であると見る実験主義的な経験論をうち樹てることは確かに実践的重要性をもつもの」と明言しているのである.

なお上記は次に掲げる原典資料に基づくものである.

> As long as the only theories of value placed before us for intellectual assent alternate between sending us to a realm of eternal and fixed values and sending us enjoyments such as actually obtain, the formulation, even as only a theory, of an experimental empiricism which finds values to be identical with goods that are the fruit of intelligently directed activity has its measure of practical significance.

"THE QUEST FOR CERTAINTY"——Operationalism を主軸として——の現代的意義

本書の論説について，認識論上，新実在論・現象学・批判主義などその立場を異にする学派からの批判は別として，特に経験論を肯定する立場からの諸批判をここに掲げる.

Randall は "The Philosophy of John Dewey" の論説において

> In the broadest sense, it is the experimentalism of the anthropologist, of the student of human institutions and cultures, impressed by the fundamental role of habit in men and societies and by the manner in which those habits are altered and changed……It is a method of inquiry, of criticizing traditional beliefs and instituting newer and better warranted ones.

要約すれば，デューイの実験主義は広い意味において，人類学者の，そして人間の制度及び文化の研究者などの諸種の社会において，習慣が修成され変容していく仕方に感動したものの実験主義である，としてそれは伝統的信念を批判し，新らしく，よりよく保証された信念をもっておきかえる探求方法である，と広い観点より評している.

これはデューイが自ら称する実験的経験論 (Experimental empiricism) に通ずるものがあり，「経験は生物の環境に対する行動的な交渉の全過程であり，認識もまた伝統的経験論の述べるような静観的，心理学的なものでなくて環境を統制しようとする行動の仕方である」とか，「観念の真偽を決するものは，先行的な不変の実在との一致・不一致でなくて環境統制いかんによる．ゆえに自然法則も事物を有効に処理する方法，器具 (Instrumentalism)，である.」とかの彼の主張に，まさに適合している．これは更に彼の提唱する，自然主義的人間主義，(Naturalistic humanism)，即ち「自然と人間と社会との連続性 (Continuity of nature, man and society) を強調する，哲学上において，きびしく二元論を批判する立場をとり，従って自然から社会への人間の成長もまた連続的なシーケンスによって一貫されるとするもので，人間の成長を彼独自の経験的方法によって認識しようとするもの」と相俟って哲学上独特の境地を開拓すると共に更に現代のハイテクノロジーの世にあって，上記の実験主義の持つ意義は特に深いと言わねばならぬ．しかのみならず，その哲学を基盤とする教育観がアメリカ並びにわが国はもとより，広く世界各国の教育発展の一大契機となったことも明記されなければならぬ.

なお又彼が第二次世界大戦中に「この戦争は地球大的戦争であるが故に平和は世界の全民衆に対して尊敬を払う平和でなければならぬ，(Cf Naturalism and Human Spirit. p.16)」と主張したことも上述の自然主義と併せ考察するとき，確かに「戦略核戦力」の称せられる現代世界において見逃すべからざる歴史的意義を持っていると言わねばならぬ.

上記に対比し，批判を受けている点

James Feibleman は "An Introduction to Pierce's Philosophy Interpreted as a System" において「デューイの主張は，パースの論理学のうち，「真理の探究と説明と応用に関んる方法」のただ一つの領域だけをとり出して論理学全般と言っていて，これでは人間の認識の構造を解くことはできない」と批判している．

また，武谷三男氏は「科学の把握」の中で，「現代物理学の進展において，原子・電子・中間子・中性子などの実体を設定しなければ前進できなかった．ところがこれはデューイが全く哲学的に基礎づけようとしなかった実体なのである．しかもこの実体が物理学においては実験的操作活動によって到達できるものである」と言い更に「デューイの考え方では近代物理学に関する限り，ブリッジマンなどの考え方から一歩も出ていない．彼の考え方では対象は思惟と行動の二つの中に解消してしまう．(中略) 自然科学に対する解釈を一面的にしてしまう．」と批判している

上述したように本章に関する彼の哲学に対しては讃美，批判ともに区々に見られるが，この小論を通じて強調し来った「実験主義の普遍的適用」こそは，まさにデューイ哲学の刮目すべき貢献と称すべきであろう．

参　考　文　献

1) John Dewey : QUEST FOR CERTAINTY, 3～313 Gifford Lectures, New York (1929)
2) John Dewey : 植田清次訳 : 確実性の探究, 25～26 春秋社 (1950)
3) 魚津郁夫 : デューイ, 137～139 平凡社 (1981)
4) l bid : 142～143
5) John Dewey. 植田清次訳 : 確実性の探究, 299～300 春秋社 (1950)
6) l bid . 300～316
7) l bid : 340～343
8) John・E・Smith. 松延慶二訳 : (The Spirit of Amencan Philosophy) , アメリカ哲学の精神, 134～137 玉川大学出版部 (1980)
9) l bid : 180～184
10) 鶴見和子 : デューイ研究, 55～74 春秋社 (1952)